

僕と戦争と十二人の守護者

私の黒い天使様

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中性的な顔立ちだがイケメンで何時も愛らしい仕草で時折魅せる男らしさとドジな一面を持つ吉井明久は子供の頃から女性に大人気でその反面、男子には敵を作る事が多いのが悩みの種である。

文月学園入学して2年目の時に彼の愛を一身に受けたい者と彼を邪魔に思う男達（モテない）の連合と彼を守る女達と戦いに発展しようとしていた……

※一部のキャラクターは著しく性格が崩壊して行きます。

怪盗キッド第三作、明久ハーレム作品

今回もアンチ・ヘイト対象はお馴染みの姫島コンビに加え根本が追加、ご都合主義作品。

瑞希&美波が好きな方は回れ右をして閲覧をしないで下さい。

作品に対する批評にはお答えしますがアンチヘイトに対する批判は受け付け無いのでそれも同意出来ない方は観て戴かなくて結構です。

明久×翔子×優子×愛子×友香×美春×美紀×葵×オリ女×?

雄二×オリ女ムツツリーニ×オリ女秀吉×?

序盤にかけてBLあるかも? 警告タグは保険

目次

プロローグ&設定集	
キャラクター設定集	1
プロローグ	10
試験召喚戦争編	
第1問 僕と優子ちゃんと振り分け試験	13
第2問 僕と彼女達と新学期の朝	18
第3問 僕と優子ちゃんと黒装束	22
第4問 自己紹介と戦争の引き金	25
第5問 僕と引かれた戦争の引き金	31
第6問 僕と交渉と学園長	40

プロローグ&設定集 キャラクター設定集

吉井明久

2年Fクラス

女性的な顔立ちだがイケメン、身体付も小さく華奢だが様々な格闘術に精通している為に喧嘩は強い。

性格も優しく弱い者や困っている人を放って置く事が出来ない為にだれかれ構わず助けに入る。

成績も非常に優秀で去年は幼馴染みの霧島翔子と常に首席争いをしてきたが翔子と同じ幼馴染みの悪友兼親友の雄二達と散々バカをやつて来た為に周囲からはバカとして認識されているがバカの代名詞である『観察処分者』では無い、理由は明久が教師達に何時も迷惑を掛けているお詫び兼お礼として『観察処分者』に志願したがそれを知った女子から少しでも長く明久と長く一緒にいる事が出来るという理由から『観察処分者』の志願者が殺到して収集が就かなくなつた為に見送られた。

女子からの人気をほぼ独り占めしている為に男子からの風当たりは強いが女子人気が高いのと明久自身も非常に強い為、何も言えない、本人はその自覚は全くと言って皆無で自分がモテるとは思っていない。

幼馴染みの霧島翔子の姉である霧島鶯は姉的な存在で鶯自身も明久を弟として可愛がっている。

雄二と鶯が付き合っている数少ない人物。

振り分け試験では秀吉の姉の優子が試験中に倒れたので保健室に連れて行った為にFクラス。

学園長の藤堂カヲルと校長先生の竹原は母方の祖父母に当たる。

その為に学園創立前から召喚システムに関わりが有るために召喚獣の操作技術は補習担当の西村先生(召喚獣を使っても生身の鉄人には勝てないが)を凌ぐほどである。

姫路、島田の二人からは女子と仲良く話しているだけと言う理由だけで理不尽な暴力を振るわれていて嫌いだが元々優しい性格の為に全て許してしまっている。

備考

文月学園女子人気No. 1 98%

秀吉を男と認識している。

秀吉、優子、ムツツリーニの出会いには高校生の時

女性的な幼い顔立ちだがイケメン。

皆が喜んでくれるので女装は嫌いでは無い。

気は弱い。

召喚獣 ゴスロリ風のメイド服

武器 サーベル

腕輪 『聖剣の腕輪』

発動キーは勝利を約束されし聖^{エクスカリバー}剣

発動キー通りに発動すれば必ず勝利がもたらされる。

相手の残り点数に関わらず、剣に触れると召喚獣は消滅する。

消費点数は単体でも1000、総合科目で10,000点と消費が

激しいが一度抜けば無敵の威力を誇るので余り関係が無い。

坂本雄二

2年Fクラス代表

明久、翔子、鶴とは小さい頃からの幼馴染みで明久と同じく成績、武

道共に優秀。

頭の回転も早く『神童』と呼ばれているが1年の時に明久達と散々

バカをやって来た為に明久達と同じくバカと認識させている。

それは演技で2年生から解禁される『試験召喚戦争』である目的を

果たす為である。

幼馴染みの鶴とは翔子と明久の手助けで高校になって付き合い始

めた。

備考

『悪鬼羅刹』の二つ名は不良狩りとして有名

土屋康太

2年Fクラス

『私と明久との恋模様』参照

学力は保健体育は学園一、その他もDクラスレベルはあるが雄二の計画に付き合ってFクラスに点数を調整した。

備考

ムツツリ商會を営んではいるがモデルにはキチンと許可を取り写真の売上金の1割りをモデルに支払っている。

Dクラス代表の青木佳子とは付き合っている

木下優子

2年Fクラス

1年の頃から成績は優秀だが大好きな明久と同じクラスに成るべく勉強を重ていたが無理が祟り振り分け試験で熱を出していなながら試験に挑だが力尽きて倒れてしまい途中退席でFクラスへ…

しかし結果、明久から助けられてた為と同じクラスに馴れた事を内心では喜んでいる。

Aクラスに弟の秀吉がいるが………

備考

腐女子ではない

秀吉に優しい

文月学園の美人姉妹

明久ヒロインその1

姫路瑞希

2年Fクラス

『私と明久との恋模様』参照

備考

振り分け試験は病欠にてFクラス

明久の本気の学力は知らない

島田美波

『僕と最愛の2人のお嬢様』参照

備考

明久の本気の学力は知らない
彼女にしたくないランキングNo. 1 100%

霧島翔子

2年Aクラス代表 学年首席

3年Aクラス代表の霧島鶴の実妹。

雄二と明久の幼馴染みで明久が大好き。

腕輪

備考

ヤンデレではない

文月学園の美人姉妹

明久ヒロインその2

木下秀吉

2年Aクラス

姉の優子と共にAクラス入りを目指していたが優子が振り分け試験で倒れてしまった為に叶わなくなってしまった。

振り分け試験では優子と同じ教室で受けいたが優子の望みでそのまま試験を受けAクラス入りを果たす。

周囲からは容姿のお陰で文月学園の二大美人姉妹として認知されているが本人は男と言っているが……。

備考

秘密あり…？

文月学園の美人姉妹

演劇は好きだが演劇部には所属していない

工藤愛子

2年Aクラス

1年の3学期に転校して来た当初はクラスから孤立していたが明久の助けもありクラスに馴染める様になり友人を爆発的に増えて

いった。

それ以来明久の事が大好きになる。

備考

明久ヒロインその3

久保利光

2年Aクラス 学年次席

去年は首席の翔子、明久と首席争いをしていた。

明久の学力や人柄に惚れている。

備考

男子生徒の中で数少ない 明久派

明久好き

終盤………？

ヒロイン？

腕輪 鎌鼬

霧島 鷗（きりしま つぐみ） CV 沢城みゆき

3年Aクラス代表 学年及び学園首席

容姿 髪の短い翔子

得意科目 全教科

苦手科目 なし

召喚獣 デフォルメ＋犬耳＋尻尾

召喚獣 鉤爪

腕輪（召喚獣） カウンターく受けたダメージを倍にして返す。

確実に当たるがダメージを受けることが前提とされる。

2年Aクラス代表の霧島翔子の実姉、何でもこなせて礼儀正しいという完璧お嬢様。

その為に明久とは逆に男女生徒問わず人気も絶大で告白される事が後を絶たないがもし成功したとしても他の男子生徒を敵に回す事になるために告白しない者もいるほど。

しかし、幼馴染みの雄二と既に付き合っており、それがバレれば雄二に危険が及ぶ為に隠している（主にFFF団）。

雄二のことが大好きではあるが間違ったことをすればしつかりと

注意することが出来る。基本的に丁寧語で話すが家族や雄二に対してのみ少し幼い喋り方になる。

備考

雄二と付き合っている事を知っているのは妹の翔子、幼馴染みで弟的な存在の明久とその親友の秀吉、ムツツリーニ、優子と佳子だけ。

文月学園の美人姉妹

小山友香

2年Cクラス代表

Bクラス代表の根本との恋人の噂があるが：

如月 玲奈（きさらぎ れな）CV 田中理恵

容姿

蒼い髪の毛を腰ぐらいまで伸ばし、翡翠色のぱっちり眼を持つ

体型はムツツリーニいわく「かなり着痩せしていてD以上はある」とのこと。

ウエストはしっかりと括れていて特殊な性癖でなければ確実に見惚れるレベルのスタイル

成績 全力でAクラス3位レベル

普段は抑えてCクラス2位でCクラス代表に真正面から文句を言える位の信頼関係

得意科目（全力時点数／抑えた点数）

数学（900～800／180）

科学（750～850／170）

家庭科（900オーバー／250）

苦手科目 古典（300～400／70～90）

召喚獣 デフォルメに狐の耳と尻尾（九本）

武器 鉄扇

性格 普段はクールで滅多なことでは怒らないが本気で起こると鉄人でも気圧されるレベルの怒気（殺気？）を（笑顔で）放つ

明久Loveである。

備考

Cクラス参謀兼軍師

明久ヒロイン4

青木 佳子（あおき けいこ） CV 後藤沙緒里

2年Dクラス代表

容姿 黒よりの茶色のセミロング。わざわざ束ねて項を魅せるように上の方で結っている。顔はどちらかという幼い感じ。茶色がかった目は比較的細いが小さい訳じゃなく、目を開くとパツチリでそれなりの大きさ。

口が小さい。体型はわりかし細く、胸もそれなりにない。

雄二の計画に付き合う為、ムツツリー二と一緒にFクラスに行くはずだったが…点数調整に大きく失敗してDクラス代表にまでなってしまった……

得意科目は理科

苦手科目は古典

理科 点数は最高156点。古典は常に90点前後5点

召喚獣 デフォルメ+イタチ。長いしつぽが特徴

武器 鉄扇。点数が上がると斬撃を飛ばせるかもしれない。

腕輪はなし

ムツツリ商会への写真提供。互いに利益を得ている。互いに物静かな為よく二人でいることが多い。

目を細めてるためかクールに見えるが基本大人しいだけで話す時はよく話す。

ムツツリ商会の事をよく理解した上で了承しているあたり中々の大らかさも持っている。運動が非常に得意で土屋がFFF団から逃走する際一緒になって逃げている事がよくあり運動はわりと好き。ムツツリ商会では首筋担当だがムツツリー二本人は売りたいくないらしいが結構売れているのでしぶしぶ売っている。

備考

ムツツリー二の撮影する写真は何でも好き

自分がモデルになるのはムツツリー二の撮影機材購入に協力するため

ムツツリーニとは付き合っている

文月学園

明久にはファンクラブ（AKR）存在するが当の本人は知らない。
文月学園の女子生徒は殆どは入会している。

その反面、FFF団を中心とした反明久派なる物も暗躍している。
AKR（明久ナイトオブ라운ズ）

文月学園の女子の殆んどが加入している吉井明久のファンクラブ。
一般生徒のファンクラブ加入者には毎月、明久の写真や着ボイス等の特典を受ける事が出来る（ムツツリ商会提供）その他のグッズ等も特別価格で買う事が出来る。

一般会員はナイト（騎士）とよばれ幹部は라운ズ（親衛隊）と呼ばれている。

幹部構成は12人

幹部はどんな事が遭っても明久を愛し、守り、信じなければならぬ。

身も心も明久に全て捧げる覚悟が事が出来る者で라운ズ構成メンバーが12人の事から円卓の騎士の伝説になぞられて라운ズはそれぞれ円卓の騎士の登場人物のコードネームを持っておりそれを取り纏めてるのが会長、コードネームはマーリンと呼ばれている。라운ズになるには上記の条件は勿論の事マーリンを始めとする라운ズ全会一致で라운ズになれる。

幹部構成

メンバー コードネーム

霧島翔子

木下優子

小暮葵

如月玲奈

工藤愛子

新野すみれ

清水美春

玉野美紀

※明久に危害を及ぼす者や不快にする者には入会を許されない。
入会中に明久に危害や不快にした者は会員、若しくは幹部権の剥
奪、会員権を除名される。

明久以外に別の恋愛対象者が出来た場合は退会は自由である。

プロローグ

僕は吉井明久。文月学園通う高校生なんだ。

そして今、進級時に行われる振り分け試験へ向けて幼馴染みの霧島鶯姉さんと妹の翔子ちゃんの家で勉強の真っ最中。

「明久、大化の改新は何時起きた？」

今、僕に問題を出しているのは鶯姉さんの彼氏で僕と翔子ちゃんの幼馴染みの坂本雄二だ。

「645年でしょ」

「正解だ、流石に簡単だったか」

「……あれっ？……私が雄二から教えて貰ってた年号と違う……」

「ああ悪い、翔子。あの時は俺が間違えて教えてた、だから覚え直しとけ」

「……わかった……」

雄二とやり取りをしているのは霧島翔子ちゃん。鶯姉さんの妹だ。

「神童も間違え事もあったのですね……少し安心しましたよ」

「鶯、止してください……俺だって人間だ、間違え事だってあるさ……」

「冗談ですよ……私も貴方の言う様に完璧では有りませんからね……特に雄二の前では……／＼／＼」

「そうだな……鶯の裏の顔を知っているのは俺達だけだしな……／＼／＼」

そう言いながら雄二から頭を撫でらるのが翔子ちゃんのお姉さんで雄二の彼女、鶯姉さんだ。

「……迷惑」

「康太、私達もイチヤイチャしてみる？」

「……イチヤイチャ（ブアツ）」

「ごめん康太、大丈夫!?!」

あちら、ムツツリー二つたら鼻血吹いちやった……

今、鼻血を吹いて介抱受けているのは土屋康太。学園内では寡黙な性識者、ムツツリー二の愛称で慕われている。

理由は悪い意味では無く単に人より想像力が豊かな為に度々この様に鼻の血の華を咲かせるからなのだ。

そして、その介抱をしているのはムツツリーニの彼女の青木佳子さん1年の2学期頃から一緒に居てよくFFF団に追われているのを見ていたんだけど、1年の3学期の終わりに付き合っていたと聞いた時は正直、驚いたよ。

彼女の悪い所はムツツリーニがああなる事を分かっていたがたまにからかう事なんだよね。

「おいおい、お主らイチャイチャするのは構わぬが今日集まっている意味を忘れてはおらぬか？」

今、翁言葉で注意しているのは木下秀吉で見た目では女の子に見えるけど歴とした男の子で双子のお姉さんの優子ちゃんがいる。

「ごめん（悪い）スツ」

秀吉の注意に鵜姉さんと雄二と佳子ちゃんは謝っていたけどムツツリーニは輸血中で話せる状態では無いので手を挙げていた。

そう言えばこんな時一番に注意して来る優子ちゃんが注意に来ないけど、どうしたのかな…？

「……ハアハア……」

あれっ…優子ちゃん、何か辛そうだな…

「辛そうだけど、優子ちゃん？」

「…うん…大丈夫よ…明…バタツ」

うわっ…優子ちゃんが倒れちゃた…どうしよう…オロオロ

「どうしたの？」

「鵜姉さん、優子ちゃんが倒れちゃって…オロオロ」

「優子!？」

鵜姉さんは優子ちゃんに駆け寄り優子ちゃんのおでこに手を当てる。

「凄い熱…翔子！」

「……何、姉さん？」

「優子が倒れたの、客室を急いで用意して！あとは氷と着替えにタオルを!」

「……分かった!!」

「鵜姉さん、優子ちゃんは僕が運ぶよ！」

「お願いね、私はお医者様に連絡と雄二達に事情を説明してくるわ！」
僕は優子ちゃんをお姫様抱っこで翔子ちゃんに着いて行つて取り
敢えず客室のベッドへ寝かせた。

それからは勉強処では無くなり勉強会はお開きとなった。

雄二とムツツリーニと佳子ちゃんはそのまま帰宅したが僕と秀吉
は優子ちゃんが心配だったので鶴さんに頼んで泊めて貰う事になり
振り分け試験にはそのまま学園へ登校する事にした。

秀吉の話では優子ちゃんは普段から無理をしていたらしく風邪を
引いてしまったみたいで暫くは安静が必要だそうだ…

でも明日は振り分け試験：優子ちゃん無事に受ける事は出来るか
な……………

試験召喚戦争編

第1問 僕と優子ちゃんと振り分け試験

文月学園振り分け試験

振り分け試験は一般的な私立校より難しいとされてるけど、これなら翔子ちゃんと秀吉は大丈夫だね♪

心配だけど大丈夫かな…？

「…ハアハア」

…ん？

「…ハアハアハアハア」ボタンツ！

…!?

優子ちゃん…やっぱり、無理してたんだ…

…つて、こうしちや居られない…優子ちゃんを保健室に連れて行かないと…

「木下途中退席は無得点扱いになるが構わないな？」

「…はい……」

僕はこの時、目を疑った…優子ちゃんが倒れたのに保健室にも連れて行くこうともしないで何事も無かったかの様に試験官を続けようとしていた。

僕は思わず優子ちゃんに駆け寄り、声を掛けた。

「優子ちゃん、大丈夫？」

「…だ、大丈夫よ……」

「いま、保健室に連れて行くからもう少しだけ我慢してね」

「…だ、ダメよ……明久君まで無得点に……」

「吉井、早く席に着け、然もないとお前も無得点だぞ」

「構いません、さ、優子ちゃん」

「分かった…吉井と木下は無得点と…チツ、私の所からクズ二人のお陰で無得点者を出すとはな……」

……エツ？

コイツ…イマ…ナンテツタ…？

ボクはともかく…優子ちゃんをクズ呼ばわりヲシナカッタカ…？

ボクは試験官に立ち

「センセイ…イマ…ナンテイイマシタカ…？」

「あん、まだ居たのかクズ、さっさとそのクズを連れて行け目障りだ…」

ブチッ！

ドゴーンツ!!

ボクは、オモワズ…ムシケラヲ、ケリトバシテイタ…

クズ教師ハ教室の壁に打ち付けられた。

「き、貴様…教師に対して何て事を…」

「ボクは生徒をクズ呼ばわりスル、ゴミムシを教師トハ、オモワナイ…!!」

ボクはそつ言つてゴミの頭をケリ壁に押し付けた。

ゴミはそのまま気を失っていた。

さあ、そんな事をしてしている場合じゃない！

優子ちゃんを保健室に連れて行こう。

「…何かあつたの…？」

あれだけ騒いでいたのにも関わらず、優子ちゃんは何が起きていたのか分かっていないみたいだ…

「何でもないよ、ごめんね…今、連れて行くから…」

「僕も着いて行くぞい」

僕が優子ちゃんを抱き抱え様とした時に秀吉が声を掛けてきた。

「大丈夫だよ、僕が連れて行くから…君は必死に努力して来たんだ、此処で無駄にしたらダメだよ」

「…しかしぢやな…」

秀吉が優子ちゃんが心配なのは分かるけど、秀吉は僕達と同じクラスになるべく必死に努力を重て来ていた…僕がどうやって秀吉を説得するか考えていると優子ちゃんが口をひらいた。

「…秀吉、アンタはこのまま受けなさい…アタシもその努力を知っ

てるからこそ、無駄にして欲しくない…アンタの努力は無駄にしてはダメよ……」

「……………分かったのぢや、明久…姉上を頼むのぢや…」

「分かったよ♪」

秀吉は優子ちゃんの説得に折れて優子ちゃんを僕に預けてくれた。

「さあ…行こうか優子ちゃん」

「…ごめんね、明久君」

「良いよ、気にしないで…」

僕はそう言つて優子ちゃんを抱き抱えて保健室に向かった……………

〈 雄二 side 〉

明久の奴やるな……

正直、明久がやってなかったら俺が蹴り飛ばしていた所はだけどな

…

必死に努力をして来たのは秀吉だけじゃ無く優子も何だけどな

……………

優子の奴…自分よりも弟の事を考えていたし…

ならば…俺の計画とは少し違う物になるがあいつらの為に俺が踏み台になるとするか……………

〈 雄二 side out 〉

〈 康太 side 〉

明久…俺は去年、あいつに助けられた……

俺の元の性格が災いして孤立していた所にあいつは光を照らしてくれた…

そのお陰で俺自身、人と接する事が苦手だったが…

その光をくれたお陰である程度は人と話せる様になった。

その中で自分で写真のモデルを頼める様になっていった中で最愛のパートナー佳子とも出会う事が出来たのはあいつのお陰だ……

それならば…俺が出来る事は……………このゴミ教師の悪態を白日の下

に晒すだけだ……

く 康太 side out く

く 優子 side く

私は気が付くと保健室に寝かされていた。

振り分け試験中に倒れてからはよく記憶に無い……

私は身体を起こすとそこには私の想い人が可愛い寝息を立てていた。

私がこの子が好きになってしまったのは何時の時だったのか……

正直、覚えていない……

この子の天性の魅力なのだろうか……この子の回りには常に笑顔に包まれていた……

誰か困っていれば率先して助けに入っていて何時も感謝されていた……

その為に常にこの子の回りには人で有り触れていた……

しかし……それを快く思わない人達もいる……

そんな人達から彼を守る為に一緒のクラスになれる様に頑張ってきたのにこれでは本末転倒だ……

「……うっ……ううくん……あれっ?」

そんな自分に自己嫌悪しているとどうやら彼が目を覚ましたみたいね。

「目が覚めた……明久君」

「あつ、優子ちゃん……具合はどお?」

「この子は……自分の事より私の心配をしてる……」

「うん、もう大丈夫よ」

「そう、良かった♪」

「でもごめんね、私が巻き込まなければAクラスは确实だったのに……」

私は気掛かりだった。

「別に良いよ…確かに秀吉達と揃って一緒のクラスになるたら良かったけど、優子ちゃんだけでも同じクラスになれるって分かってるなら今から楽しみにだから」

そんな考えは杞憂だった…彼の常に前向きな答えに私は内心安心した…

そして…Aクラス入りを目指して頑張ってきたのに彼と同じクラスならそんな事も気になら無くなり、寧ろ彼と同じクラスになれたと言う事に喜んでいた……

「もう試験も終わっている時間だし、一緒に帰ろうよ」

「そうね…」

私はそう言つて、これから彼と一緒に過ごす学園生活を楽しみにしながら一緒に下校する事にした。

） 優子 side out ）

第2問 僕と彼女達と新学期の朝

桜舞い散る季節に僕達の新たなる学園生活が始まる……………

のだが……………

「遅刻だあああああああ〜!!」

僕は目覚まし時計を破壊していたらしく新学期、早々に遅刻の危機に瀕していが……………どうやら……………僕だけでは無かったみたいだ……………

「遅刻うううう〜!!」

僕と同様に遅刻しそうな鷓姉さん、翔子ちゃん、秀吉、優子ちゃんが僕の前を走っていた……………

普段の彼女達からは想像の出来ないくらいの焦りっぷりだね……………

「おはよう、鷓姉さん、翔子ちゃん、秀吉、優子ちゃん!」

「おはよう、明久……………ハアハア」

「みんなどうしたの?ギリギリ何て珍しいね……………ハアハア」

「目覚まし時計が壊れていた……………」

おいおい……………どんな偶然?

ここにいるみんなが目覚まし時計が壊れていたってどんな偶然な

の!?

兎も角…急がないと…

「「「急げええええ!!」」」」

「…ハアハア」

「な、何とか…」

「間に合ったのぢや…」

「…でも…ギリギリ…」

「早く…振り分け試験の結果を受け取りましょう…」

みんな息も絶え絶えだね……

「珍しいな…お前達がギリギリに登校するなんて…明日は雨が降るかも知れんなあ」

少しドスの効いた声で校門の前には筋骨粒々、髪型は角刈りの大柄な男性が立っていた。

その男性は『西村宗一』トライアスロンを趣味とし、アマチュアレスリングの心得もある肉体派教師で、通称「鉄人」と呼ばれていて、召喚戦争以外でも点数が「0点」になると「戦死者は補修!!」と叫びながら何処からともなく現れて『鬼の補修』を敢行する事から全生徒から恐れられている、文月学園補習担当の教師なんだ。

「「「おはようございます、西村先生」」」」

僕達は西村先生に挨拶をした。

「おはよう、吉井、霧島姉妹、木下姉弟」

「すみません…何故かみんな目覚まし時計が壊れていたらしく…この様な時間になってしまいました…」

鷓姉さんがいち早く西村先生に事情を説明した。

「ギリギリだが…まだ時間はある、これがお前達の振り分け試験の結果通知だ」

「「「ありがとうございます」」」

僕達は西村先生から振り分け試験の結果が書かれた封筒を受け取り、結果に目を通した。

霧島鷓 3学年首席 Aクラス代表

霧島翔子 2学年首席 Aクラス代表

木下秀吉 2学年 Aクラス

木下優子 2学年 Fクラス

吉井明久 2学年 Fクラス

「霧島姉妹は流石だな、姉妹二人揃って首席とは…恐れ入ったよ」

「「ありがとうございます」」

西村先生の労いに鷓姉さんと翔子ちゃんはお礼を言った。

「それに引き換え…木下姉は残念だったな…普通に受けていれば姉弟揃ってAクラス入りは確実だったのに……」

「気にしないで下さい、学業に専念する剩りに体長管理を怠った、アタシのミスですので西村先生が気に病む必要は有りませんから……」

西村先生の言葉に優子ちゃんは余り、気にしないで欲しいと言った。

「それに引き換え吉井！お前は木下姉を保健室へ連れて行った事は立派だが…何故、立ち合いの教師まで蹴り飛ばす必要があったんだ!!」「すみません、あの屑教師が優子ちゃんを屑呼ばわりして…気が付いたら蹴り飛ばしてました…アハハ……」

「全く…お前は少しは感情を抑える事を覚えないと…まあ、お前の場合は人の為にやっているから強くは言えないがな…」

西村先生のお説教に僕は苦笑いをするしか無かったが西村先生も僕の性格を良く理解してくれて余り強くは言っていなかった。

そして僕が蹴り飛ばしていた教師は試験中の目撃者や僕の友人達

の活躍で僕は不問とされて優子ちゃんを屑呼ばわりした教師は教員免許は剥奪されたそうだ……

優子ちゃん達はこの事を知っていたからこの場では何も言われなかったが……

振り分け試験後に雄二から知らされた鷗姉さんや翔子ちゃん、熱で倒れていて事情を覚えていなかった優子ちゃんからこつぴどく怒られていたの言うまでも無い……

「兎も角だ、霧島姉は最後の学園生活を霧島妹と木下弟は更に学業に磨きを掛けて楽しむ時は楽しむ様に、木下姉と吉井は努力を怠らなければ来年はAクラスだ、各自学園生活を楽しんでこい!!」

「「「はい!!」」」

キーンコーン♪カーンコーン♪

予鈴だ……

「それでは西村先生、私達はこれで失礼致しますわ……」

僕達は鷗姉さんに続いて西村先生に挨拶をして自分達のクラスへ向かう事にした……

第3問 僕と優子ちゃんと黒装束

僕と秀吉、翔子ちゃんと優子ちゃんは鶯姉さんと別れて2年Aクラスの前に来ていた。

「……これは凄い……」

「全くぢやな」

「これは教室なの!？」

僕達はAクラスの設備の凄さに驚いていた。

『個人用冷暖房完備、システムデスク、リクライニングシート、個人ノートパソコン支給、ドリンクサーバー、最新型の大型ディスプレイ、有名絵画、お菓子、教室の後方には簡易キッチン完備、デザートet
c』

これは豪華ホテルのスイートルームを彷彿とさせるような設備のだったんだ。

「……姉さんからは訊いてはいたけど……」

「学園長はこれはやり過ぎぢやろうて……」

「まあ……アタシ達はこのクラスで過ごす為に頑張つて来たんだけど……」

「お祖母（学園長）ちゃん……何を考えているの？」

僕は学園の最大のスポンサーの霧島財閥の娘である鶯姉さんや翔子ちゃんに申し訳ないと思っていた。

「……秀吉……教室に入ろう……」

「そうぢやな……明久に姉上はここで別れぢやな……」

「そうね……明久君、それじゃあ行きましょうか」

「うん♪」

僕と優子ちゃんは秀吉と翔子ちゃんと別れてFクラスに向かった。

《移動中》

「優子ちゃん…僕達…何時、山小屋に迷い込んだのかな…？」

「明久君…現実から目を叛けたいのは分かるけど…これは紛れもない現実よ……」

僕と優子ちゃんはこれまたFクラスの設備の酷さに驚いていた。

本当にお祖母ちゃんは何を考えているんだろう…？

学力の高さで設備の格差を点けているのは分かるけど…これはあんまりだ。

割れたガラスに腐った畳、外から見ただけでも衛生面的にお世辞にも良いとは言い難い状態なのだ。

「…兎も角、中に入りましょうか…」

「……そうだね…」

僕は優子ちゃんと教室に入ろうと扉を開けた。

「遅かったな…蛆虫野郎」

入る成りいきなり罵倒された!?

「あら…雄二君、それは誰に言ったのかしら…アタシ？」

「お、お、落ち着け…優子…まさかお前とは思わなかった…」

「アタシ、じゃないとしたら明久君かしら…？」

何でだろう…？

優子ちゃんから黒いオーラと不動明王が見える気がする…

僕がそんな事を考えていると…

ヒュッ！パシッ！

何処からかカッターナイフが飛んできたのを僕はキャッチした。

「危ないじゃない、こんな事したら…僕じゃ無かったら怪我をしていたよ」

とカッターが飛んできた方向を向くとそこには黒装束とマスクにFFFと入った集団がいた。

「黙れ、吉井！貴様は学園の女子の視線を独り占めしているだけでは無く、我が学園の2代美人姉妹と登校する等万死に値する!!それに我々のオアシスである秀吉と仲良く教室入りとは…弁解の余地もない!!」

あ…この人達…優子ちゃんの事を秀吉と思っているんだ…

「ああ…この子、秀吉じゃ無くてお姉さんの優子ちゃんだよ」

「二」チツ…ハズレの方か…」

…えっ…コイツら…今、ナンテツタ…

「イマ…優子ちゃんをハズレヨバワリシナカッタ…？」

僕は黒装束集団に殺気を放ちながら問いかけた。

「二」ヒイイイ…」

「止めときなさい、明久君」

僕の殺気に気付いたのか優子ちゃんが慌てて止めに来た。

「ダメ…コイツら…優子ちゃんをハズレ呼ばわりしたから…お仕置きシナイト…」

そして僕は黒装束集団に近付いて行くと…再び、優子ちゃんに呼び止められる。

「明久君…」

「何かな…優子ちゃん？」

優子ちゃんが止めに入ったので覆面集団は止めて貰える様に優子ちゃんをじつと見ているが…

「殺り過ぎない様に処刑しときなさいよ」

「たぶんムリ…さあ…神への祈りは済ませたかな…？済ませて無くても処刑するケド…」

そう言っ僕は害虫の駆除を完了させた所で先生が入って来たので僕と優子ちゃんは黒い山をほったらかして自分の席に着いた。

後、余談だが僕が黒装束集団の処刑中にムツツリー二は一緒にFクラス来るはずだった佳子さん(Dクラス)から戻って来ていたそう。そして雄二は何故かボロボロになっていたけど何でなんだろう…

？

第4問 自己紹介と戦争の引き金

2年Fクラス教室内

チャイムがなり、暫くすると白髪混じりの初老の男性の先生が教室に入って来て黒板に自分の名前を書こうとしたが辞めてこちらを向いた。

僕が始末した黒い屍の山に先生は気にもせず、何事も無いようにクラスの設備の確認を始めた。

「皆さん、卓袱台、座布団など行き渡ってますね、何か不備があれば申し出て下さい」

「先生、座布団に棉が入って無いんですけど？」

「我慢して下さい」

ヒュウウウウ

「先生、隙間風が寒いんですけど？」

「我慢して下さい」

ベキツガシヤツ

「先生、卓袱台の足が折れたんですけど？」

「我慢して下さい」

「無理だっつの!!」

「ハハハ、冗談ですよ。後で木工用ボンドを支給しますので自分で直しして下さい」

僕が設備の不備を申告すると先生のまさかの『我慢して下さい』の三連発……流石は最低クラス、設備も最低なら対応も最低だね…。

「皆さん、揃いましたね。私がこのクラスの担任の福原慎です。これからよろしく…」

バキバキ、ガラガラ

福原先生が自己紹介していると教壇が音をたてて崩れた。

「……工具を取って来ますので、皆さんは自己紹介をして下さい……」

福原先生はそう告げると教室から出て行ってしまった。

「先生が出ていっちゃたし……そしたら外側の窓際の人から自己紹介を

「……して貰いましょうか」

「福原先生が教室から出て行くのを確認した優子ちゃんが代わりに自己紹介を促した。」

「流石は優等生な優子ちゃんだね、代表は雄二何だけど……直ぐに纏め役をかって出てるよ。」

「……そんなこんなで自己紹介は進んで行く……」

「……土屋康太、明久に危害を加える事があれば……アキちゃんの写真は売らないからそのつもりで……」

「……吉井は異端者なのに何故だあああ……!」

「……当たり前様にFクラス男子から悲鳴にも似た奇声上がる。」

「……うん……何で僕は異端者何だろう……?」

「……アキちゃんは明久だ……モデルに危害を及ぼす者に何故、売らなきゃならん……」

「……そう、吉井明久ことアキちゃん……僕の女装した写真は彼の経営するムツツリ商会では鷗姉さんや秀吉、翔子ちゃんと優子ちゃんに次ぐ人気商品らしい……」

「……僕は皆が喜んでくれるならと言う事で僕の写真の売上の1割と僕に内緒では撮らない事を条件に時々、協力している。」

「……分かったのなら……明久に危害を加えるな」

「……「イエス、マイロード」」

「……うん、流石はFFF団……自分の欲望には忠実だね。」

「……FFF団の会長を務めている須川君とは同じクラスだったけど……」

「……クラス男子全員（雄二とムツツリーニ以外）がFFF団って……明日から僕の命は大丈夫かな……?」

「……そんな事を考えていると次はポニーテールに黄色いリボンと無い……がトレードマークの女の子の自己紹介に入っていた。」

「……ウチの名前は島田美波。去年に転校してきたドイツからの帰国子女です。趣味は……」

「吉井明久を殴る事です☆」

何：いきなり危険な趣味を発言して：

彼女は島田美波、去年の同じクラスで初めの時は日本語が上手く話せず、他の人に不快を与える発言をしていてクラスから孤立していた所に僕が助けに入って友達になったまでは良かったけど…

それを機に何故か度々、お仕置きと言う名の暴力を振るわれる様になつてしまつたけど：多分、僕になにかしらの原因があるのだろうか
ら仕方ないよね：

その発言に優子ちゃんが凄い殺気を出していたけど僕が宥めて落ち着かせた。

次は優子ちゃんか：

「アタシは木下優子。Aクラスにアタシの弟が居るけどあの子は男だから無駄な事はしないように！」

「「バカなああああ〜!!」「」」

バカな男共の悲鳴が木霊する……

「でも姉は秀吉を男とは言ったが女では無いとは言っていない！」

「どういう事だ…?!」

「つまりはどちらにも属さない第三の性別、秀吉つて事だ！」

「「「おおおお〜!!」「」」

「それなら何も問題はない！」

「秀吉は秀吉、恋愛も自由だ!!」

「お前、頭いいな!!」

バカ、悪いよ：地球の生物学上には性別は二つ、男の子と女の子しか存在しないからね。

優子ちゃんも余りにもバカな発言に頭を抱えて溜め息を吐いてる

し…

「まあ…兎も角、よろしく頼むわ。それと明久君やアタシの友人達に手を出したら他の女の子にFクラスの男子は危険だから付き合わない方が良いと言っておくからそのつもりで!!」

そう言つて優子ちゃんは自分の席に座った。

次は僕の番だね。

「僕は吉井明久。趣味は…」「総員構え!!」つて…何でさ!皆して物騒な得物を構えて…」

「黙れ!貴様の存在がどれだけ我々に疎ましい物か女子からモテモテのお前には我々の気持ち分かるまい!!」

「まあ…さて明久をここで殺ればお前達は全ての女子を敵に回す事になるぞ」

先程までボロボロになっていた雄二が復活して止めてくれた。

「…お前達はムツツリ商会のブラックリストに入れておく…今後はアキちゃんだけでは無く秀吉の写真も含めて全部、売らない」

「さっきの忠告を無視したから女子全員に付き合わない様に言つときましよう…」

ムツツリー二と優子ちゃんも応戦した結果……

「…何故だあああゝゝ!」

君達が忠告を無視したからだと思うよ。

「…とまあ以上です」

これ以上、自己紹介をしていると身の危険がするので僕は早々に自己紹介を切り上げる事にした。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

「…えっ?」

僕の自己紹介が終わると一人の女の子が教室へ入ってきた。

そして誰からというわけでもなく、教室全体から驚いたような声上がる。一方、僕の頭から?マークを浮かべていた。

「保健室に行っていたら遅れちゃいました…」

「丁度良かった、姫路。今は先生が工具を取りに行つて不在で自己紹介中だ。お前から頼むわ」

雄二が入って来た女の子に声を掛ける。

「姫路瑞希です。よろしくお願いします！」

「はいっ！質問です。」

すでに自己紹介を終えた男子生徒の一人が高々と手を挙げる。

「あ、は、はいっ！なんですか？」

登校するなり、質問がいきなり自分に向けられて驚く姫路さん。

「なんでここにいますか？」

僕も驚いているけど、いくらなんでもその聞き方は酷いんじゃないかな…。人によつては歓迎されていないとか思っちゃうよそれ……。

「そ、その…。振り分け試験の時、熱を出してしまつて……」

その言葉を聞き、クラスの面々は『ああ、なるほど』と頷いていたけどみただけ。

試験途中での退席は0点扱いとなるので僕や優子ちゃんと同じく彼女も振り分け試験を最後まで受けることが出来ずにFクラスに来てしまったらしい。

そんな瑞希ちゃんの話聞き、クラスの中でもちらほらと言いつの声上がる。

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ。化学だろ？あれは難しかったよな」

「俺は弟が事故にあつたと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「実は前日の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘を有難う」

これは想像以上にバカだらけだね。

瑞希ちゃんまでこのクラスか…正直、彼女の事も余り好きでは無いけど…

身体が元々弱いからこのクラス環境じゃ少し心配だね…

僕はそう考えていると1つの可能性を思い付いた。

「雄二、ちよつと話をしたいんだけど…」

「何だ？」

「ちよつと…（こじやあね…）」

「じゃ、廊下に出るか…」

「うん」

そう言って僕と雄二は廊下に出た。

2年Fクラス廊下前

「話つてのは試召喚戦争の事だろう？」

「うん、努力して来た優子ちゃんや身体の弱い瑞希ちゃんまでこのクラスで過ごさせる訳には行かないからね…」

「でもどうする？ 姫路は兎も角、優子の奴は納得しないだろう。アイツはAクラスに入る為に努力を続けて来た。それだからこそ、Aクラス連中の努力を知っているのにAクラスの連中を引き摺り降ろす様な真似には協力してくれるとは思えないが……」

「大丈夫、お祖母学園長ちゃんにAクラスとの試召喚戦争で勝ったら振り分け試験をして貰う様に頼むから。それだったらAクラスの設備もそのまま残るから優子ちゃんも協力してくれると思うよ」

(ほう…明久の奴、ちゃんと考えているんだな…なら俺は…)

僕がそう言くと雄二は何か考えていたみたいだけど直ぐに僕の提案を了承してくれた。

「分かった…元よりそのつもりだったしな。ババアの交渉と優子の説得はお前に任せた。後は俺に任せとけ！」

「ありがとう、雄二」

「おや、坂本君に吉井君。まだHR中ですから教室へ戻って下さい」

先生が戻って来たので僕と雄二は戦争の引き金を引く為に教室へ戻る事にした。

第5問 僕と引かれた戦争の引き金

2年Fクラス教室内

僕と雄二は教壇の修理に必要な工具を取り、教室に戻ってきた福原先生に教室に戻る様に促されて教室に戻った。

自己紹介も一通り終わっていたみたいで後は代表の雄二を残すのみとなっていた。

「自己紹介は一通り終わっているみたいですね。それでは最後に代表の坂本君、自己紹介をお願いします」

「俺がこのクラスの代表、坂本雄二だ。坂本でも代表でも好きな様に呼んでくれ」

福原先生に促され雄二が教壇の前に立ち自己紹介を始めた。

さて…本題はこれからだ……

「そこでお前達に聞きたい…Aクラスはリクライニングシートにシテムデスク、お菓子の食べ放題等、それに比べてこの教室はどうだ？古びた教室は山小屋と変わらず、机は壊れかけた卓袱台に綿の無い座布団、窓ガラスは割れてすきま風が入る窓……」

雄二は勿体振って一呼吸を起す。

「この設備に不満は無いか？」

「二」大有りじゃあああああ……!!「二」

雄二の言葉に僕とムツツリーニ以外の男子の不満が爆発した。

優子ちゃんはそのを見てイライラしている様だ…

雄二はそれを知ってか知らずかそのまま言葉を続ける。

「お前達の気持ちは良く分かった。そこで俺はAクラスに試召戦争を仕掛けてみようと思う」

「勝てるわけがない」

「これ以上設備が下がるのは嫌だ」

「姫路さんや木下さんさえいれば何でもいい」

「やっぱりFクラなだけな事はあるね…全くやる気が見られないよ。」

てか、最後のどさくさに紛れて何言っているんだ。一応、優子ちゃ

んの方を確認してみるが頭を抱えながらやっぱりと言うか不満げな顔しているし……

でも最後の奴も優子ちゃんの事をハズレ呼ばわりをしていなかったっけ……?

「しかし、俺達にはAクラスに勝てるだけの勝算がある!!」

雄二はクラス男子の不安を一蹴する様に自信たっぷり宣言をした。

「先ずはムツツリーニ事、土屋康太」

雄二が言うのと無言でムツツリーニが立ち上がる。

「こいつは皆も知っての通り、学園でムツツリ商会を経営している。その人脈と隠密行動等から情報収集力と保健体育の学力は学園一だ！」

「!!「おおおおくく!!」!!」

クラスから歓声が上がる。

「次に木下^{優子}と姫路、この二人に関しては説明は不要だろう……」

「そうだ、木下さんや姫路さんが居れば……」二人は本来ならAクラスレベル何だよな!」「姫路さん好きだ!!」「木下さん踏んで下さい!!」それぞれの思い思いの事を口にして然り気無く瑞希ちゃんに告白するのは良いけど最後の君、性癖を疑うよ……

それを聞いていた優子ちゃんが不満そうにしていたので事情は後から話すからと言って取り敢えずは納得して貰った。

「最後に吉井明久」

えっ……何で僕なの……?

確かに学力は高いけど、去年は散々バカをやっていたからバカで有名なはずだよ?

「えっ……そんな奴クラスに居たか?」「誰だ、そいつ?」

流星はFクラス……

さつき殺しに行っていた人間の事をもう忘れているよ……

「雄二……何でそこで僕の名前を出す必要があるの? ヒュッ! パシッ! 危ないなあ」ヒュッ! サクッ!

僕は何処からか放たれたカッターを掴んで投げて来た相手に当た

らない足元に刺さる様に投げ返した。

「危ねえじなねえか、吉井!!」

「なあ〜んだ、キチンと僕の名前を覚えてるじゃないか須川君。それとも…さっきの優子ちゃんへの警告を忘れていたのはワザとなのかなあ〜?」ゴゴゴゴゴッ!

「止めろ、明久。お前が暴れて試召戦争前にこいつらが死なれては困る」

「でも、雄二…」

(任せておけ、こいつらは餌を与えてやれば気持ちはそちらに向くから安心しろ)

雄二はアイコンタクトで言ってきた。

(わかった、任せるよ)

僕は雄二にアイコンタクトを送り返し任せる事にした。

「お前達、少し考えてみる。俺達が試召戦争をするに辺り明久の手助けをすればモテるチャンスでもあるんだぞ」

「おお、そうか!危なくなつた吉井の代わりに補習室送りにされても…」吉井とコンビを組んで戦って活躍したりすれば…」

「その通り!少しはお前達にもモテるチャンスが巡って来ると言う事だ!」

「「おおおおお〜!!」」

流星は雄二、人身掌握も上手いよね♪

いや…Fクラスが単純なだけかな?

「それなら明久の助けになる事だ。分かったか、野郎共!!」

「「イエス、ユアハイネス!!」」

「ならば、筆を取れ!試召喚戦争に勝利し我々が目指すのはAクラスのシステムデスクだ!!」

「「「おおおおお〜!!」」」

これで士気は最高潮だね。

「ここぞだ。明久には大使としてDクラスへ宣戦布告に行つて貰いたい」

「ちよつと待つてよ、雄二君。それは余りにも危険だわ!」

「大丈夫だ、木下^{優子}。Dクラスには青木^{佳子}が代表をしているから何かあれば真っ先に止めに入るだろうさ」

（それに親衛隊もいるから大丈夫だ）

「そう：なら安心だけどアタシも念のためには着いて行くわ」

雄二は優子ちゃんに何か目配せをしてたみたいだけど：何だろう？

優子ちゃんも着いて行く気満々みたいだし：

「ちよつと待って、木下が行くぐらいならウチが着いて行くわ」

「良いのか島田。Dクラスにはお前の天敵のアイツがいるはずだぞ？」

雄二からそれを聞いた美波は顔を青くした。

「そ、それなら仕方ないわね：今日の所は木下に譲るわ……」

美波の事だから僕がDクラスの女子達と話すだけでもお仕置きをする気なだったのだろうけど：

でも何で急に思い直したんだろう……？

「じゃあ話も決まった事だし、行きましようか明久君」

僕も優子ちゃんに話があったから丁度良いから了承する事にした。

「それじゃあ行こうか、優子ちゃん」

しかし、学園の方針とは言えこの設備は衛生面的にお世辞にも良いとは言えない：僕は優子ちゃんや他の人に気付かれないように教室の写真を数枚撮って僕は優子ちゃんはDクラスの教室に向かった：

「明久君」

Dクラスへ向かう途中の新校舎から旧校舎への渡り廊下に差し掛かった時に優子ちゃんから話掛けられた。

「何かな優子ちゃん？」

「明久君は何の為に試召戦争をするの？」

僕の答えは決まってる…

「優子ちゃんと瑞希ちゃんの為だよ」

「それは分かっているわ。努力が報われなかった私や姫路さん、姫路さんに到っては体も弱い…その為に召喚戦争で勝利して設備の交換を行い、良い設備で授業を受ける…でも、それでもアタシは納得が出来ない……」

「優子ちゃんの気持ちは僕は理解しているよ。雄二やムッツリーニ、瑞希ちゃんは別としてFクラスの人達は今まで努力が出来たのに努力をして来なかった人達ばかり…そんな人達が何の努力もせずに試召喚戦争に勝利して努力をしてきた人達を引き摺り下ろしてまで良い設備を手に入れる事が納得出来ないでしょ？」

「ええ…その通りよ」

「大丈夫、僕と雄二はそんな事は考えてはいないよ…」

「だったら…どうするの？」

「Aクラスに勝ったらお祖母^学母^園ちゃんに頼んで再振り分け試験をして貰う様に頼むから。勿論、戦争も出来るだけ早期終結をさせる様に頑張るけどね♪」

「そう…そこまで考えているのならアタシは何も文句は無いわ。アタシはアタシ成りに今度こそAクラスに入れる様に努力するだけね♪」
そう話している内に気が付けばDクラスの教室に着いていた。

「「ぎいやああああ〜!!」」

明久と優子がDクラスに行つて暫くすると突然、新校舎から悲鳴が聞こえてきた。

そしてその後、少しすると何故か優子だけが教室に戻つてきた。

「ゆう…木下、明久はどうした？」

「安心して、明久君なら今は学園長室に向かっているはずよ」

「何があつた？」

「それはね…」

〜 回想中

「失礼しま〜す」

「やあ、明久君に優子。私達Dクラスに何か用かしら？」

僕達の事情を知っている代表の佳子ちゃんが出迎えてくれた。

「!?!お兄様がいらしゃつてますわ」ピョ〜ン♪ガバツ!

「…つて、美春ちゃん、いきなり飛び付いて来ないで…ビックリするじゃないか…」

「なるほど…島田の天敵つて美春だったのね〜」

「優子さん、失礼ながら美春だけではありませんわ♪」

「アキちゃああああ〜くん」ガバツ! バタンツ!

「…つ…痛てて…と…美紀ちゃんまで…お陰で転んじやつたよ…」

チツ!

何だろう…男子から黒い物を感じるんだけど…

「確かに島田さんが嫌がるはずだわ…」

何で…二人を嫌がるんだろう?

「お兄様、美春に会いに来てくれたのですね!」

「アキちゃん、新作の衣装が出来たから着てみない?」

「美春ちゃん、ちよつと違うかな。美紀ちゃん、それはまたの機会にするよ」

「う〜ん、お兄様のいけずう〜♪」

「アキちゃん、今度は絶対に着てね」

「ごめんね、美春ちゃん。今度またゆっくり話そうね。美紀ちゃんもね」

「約束ですよ」

「うん」

僕と美春ちゃんと美紀ちゃんに約束をした所で優子ちゃんが本題に入る様に話し掛けてきた。

「全く：戯れ合う為にここに来た訳では無いでしょう、明久君：」

「そうだったね」

僕は美春ちゃんと美紀ちゃんが立ち上がるのを確認すると立ち上がって戦争の引き金を引いた。

「僕達FクラスはDクラスに試召戦争を申込みます!!」

「お兄様：早速、来ましたか：：：手加減は致しませんよ♪」

「アキちゃんとの戦争：きやあく萌えるわ♪」

「明久様：流石です：：：♪／／／」

「チッ！下位クラスの癖に舐めやがって：」

反応は様々だね……

女の子は嬉しそうだし：男の子は何故か恨めしそうだし……

「分かったわ：正直、貴方と優子が居るだけで勝てる気がしないけど、下位クラスからの宣戦布告は断れないからね。開戦時間は何時にするの？」

「今日の午後1時からお願いするわ」

「了解、お互いに頑張りましょう」

「うん、それじゃあね」

僕と優子ちゃんが教室から出て行こうとすると一人の男の子から呼び止められた。

「待て、下位クラスの癖にタダで帰れると思うなよ！」

「おっと……」

僕は殴り掛かって来た男の子を躲した。

「ちよつといきなり何をするのさ……」

「止めなさい」

佳子ちゃんが止めに入るが今度は別の男の子から殴り掛かって来

た。

「うるせえ！学園の殆どの女子の人気を独り占めをしている上に木下さんを伴って宣戦布告に来るなんて羨まし過ぎるから殴らせろ！」

全く…どんな理屈だよ……

これじゃあ…Fクラス連中と何ら変わりが無いじゃないか……

「赦しません……」

「えっ……」

「お兄様にアダなす豚野郎は美春が成敗イタシマス……」

あら…美春ちゃんにスイッチが入っちゃった……

「ソウデスネ…ワタシタチの天使サマである…アキちゃんにテヲダシタ、報いハ受けてモラワナイト……」

美紀ちゃんまで……

「ごめんね、佳子ちゃん…まともに戦える人が少なくなりそうだけど…頑張つて……」

「まあ…仕方ないわね。この人達が悪いんだし…適当な所で落ち着かせとくわ……」

そう言つて僕と優子ちゃんが教室から出て行くと……

「「ぎいやあああああ〜!!」」

数人の男の子の悲鳴が聞こえてきた。

「優子ちゃん……」

「何かな？」

「僕は学園長室に行くから優子ちゃんは先に戻っていて……」

「分かったわ……」

〜 回想終了 〜

「…つてな訳よ……」

「アハハ…味方に殺られるとはアイツらも思つてもみなかつただろうな……」

明久の人気は凄いな……

敵対する無意識とは言えクラスの女子まで完全に味方に付けてい
やがる…

「木下、開戦時間は何時だ？」

「きよようの午後一時からよ」

「了解だ。木下とムツツリーニと島田、姫路は昼休みに作戦会議をす
るから屋上へ来てくれ。明久には木下から伝えておいてくれ」

「二」分かったわ（ました）「二」

さて：戦争の引き金は引かれた：

後は明久の交渉結果と勝利に向かって突き進むだけだ！！

〈 雄二 side out 〉

第6問 僕と交渉と学園長

僕はDクラスに宣戦布告後に優子ちゃんと別れて再振り分け試験と設備の改善を行える様に学園長おぼあちゃんにお願いする為に学園長室まで来ていた。

学園長室前

「……あな……と……なんで……」

おや？誰か先客がいるみたいだね。

僕はいつもならノックをしないがお客さんが居るようなので念のためにノックをした。

コンコン

「誰だい？」

「明久です」

「明久かい、入んな。」

僕は学園長おぼあちゃんから部屋へ入るように促されたので学園長室へ入るとそこには竹原校長おじいちゃん先生もいた。

「学園長、竹原校長先生おはようございます。」

「やあ、明久。何かこの妖怪ババアに何か用事かね？」

「妖怪は良いとしてババアは余計だよ！」

相変わらず仲の良いことで…でも、おぼあちゃん普通逆だよ。

「明久からもこの妖怪に言ってくれないか？そろそろ引退して学園を私に任せるように……」

「馬鹿、言ってるんじゃないよ！あなたは学園運営は任せられるが学園のセキュリティシステムや召喚システムを任せられるほどじゃない。仮にアタシが引退して研究者として専念するのは明久が卒業してからだ。」

「それは明久が卒業すれば明久に学園長の座を譲るということですか？」

「まあ平たく言えばそうさね。しかし、卒業したばかりの明久では召喚システムは兎も角、学園経営面ではてんで素人だ、その時は支えてやって欲しいさね。」

「まあ今は明久も居ることですしそういうことで納得しときましよう。」

何だか知らない内に僕の将来を決められてる気がするけど：おばあちゃんは何だかんだ言っておじいちゃんの経営手腕は買ってるからね。おじいちゃんもおばあちゃんが一度言い出したら聞かない事と本心なのが分かってるからそれ以上は何も言わないみたいだ。

その後、不意におじいちゃんから質問をされた。

「しかし、明久。君が自分から学園長室ここに来るなんて珍しいね。何か有ったのかい？」

「うん、おじいちゃん。一つは提案、もう一つはお願いかな。」

「明久：学園内では校長先生と……」「ダメ、なの？」「グハツ!!」

僕は上目使いでおじいちゃんを見上げた。

「アハハっ!!学園の教師や男子生徒からは鬼の竹原と呼ばれているのに明久に掛かれば形無しさあね。」

「笑い事じゃない！このクソババア!!」

「何だい？孫には甘いクソジジイ!!」

また始まった：仲が良いほど何とやらと言うけどここは止めないと話が進まないや、仕方ないから止めないと……

「ストップ、ストップ！二人とも仲が良いのは良く分かったから僕が来た理由を聴かなくていいの？」

二人とも『仲が良い』と言う言葉に少しムツとしていた様子だが僕が来た用事が気になったみたいで渋々言い争いを止めておばあちゃんが事情を聴いてきた。

「で：明久。話というのは何だね？」

「うん、一つは振り分け試験の再試験。もう一つはFクラスの設備に関する欠陥を劣悪な環境改善。今のFクラスの設備ではお世辞にも言えないくらい不衛生で環境も最悪、健康な人ならある程度は我慢すれば何とか為るだろうけどそれも時間の問題。それに瑞希ちゃんみたいな元々体の弱い子が勉強するには無理だと思う。」

「明久、再試験や環境改善はこればかりはいくら孫のお前でも聞く事は出来ない。もし仮に聞き入れてしまえば私達は孫には特別扱いを

する学園長と校長と言われてしまう。それはこの学園の教育システムを揺るがしかねないから認める訳にはいかないよ。」

確かにおじいちゃんが言う事も一理ある。この学園は上位クラスはFクラスにならない様に下位クラスはAクラスを見てAクラスになるべくを勉学に励むというシステム上仕方のない事だ。

ましてや入学当初から振り分け試験は公表されていた事だ。つまり皆同じ時間を平等に与えられてきた中、努力を惜しまず慢心せず上位クラスを手にした者、大した努力もせずに自分の欲望のみでその時だけ良ければ良いと過ごしてきたFクラスに差を付けてるのにそのシステムを揺るがしかねない事だから致し方ない。

でも僕も引けない理由があるから食い下がる。

「二人ともこれを見て」

そう言つて僕は先ほどスマホで撮った教室の写真を見せた。

「これは…」

二人ともFクラスの問題の劣悪さに絶句している様だ…そこで僕は更に畳み掛ける。

「この学園のシステムとは言え最早、環境問題だよ？もし教育委員会や保護者にバレればそれこそ学園のシステム処の話じゃなくなるよね？」

「竹原、教室の管理は？」

「Aクラス〜Cクラスは私が担当しており、Dクラス〜Fクラスは教頭の竹内が管理していた筈です。」

「なら竹内に早急にFクラスの教室を必要最低限までに勉強できる環境へ改善させるように伝えな。」

…竹内？あのいけ好かない教頭か……

「それではババア、明久。私は環境改善の為に忙しく為りそうだからこれで失礼するよ。」

そう言うとおじいちゃんは学園長室から出て行った。

「明久よ、設備改善の件はこれでいいね。しかし、振り分け試験の再試験は例外なく認める訳にはいかない。喻え体調不良でもあろうとだ。」

そう振り分け試験は日時も決まってる、体調管理も試験の内と言われてしまえばそれまでだがそれは交渉するカードが無ければの話だ。

なので僕はそのカードを切ることにした。

「おばあちゃん今、僕たちが試召戦争を仕掛けているのは知ってるよね？」

「そりゃあ知ってるさ、新学期早々にバカをやらかしたもんさね。」

おばあちゃんは僕が焚きつけたとは思ってないみたいだ…まあ、実際クラスを焚きつけたのは雄二なんだけどね。

「その試召戦争は僕の提案なんだ」

「明久が？どういう事だい？」

「瑞希ちゃんと優子ちゃんの為だよ。正直、瑞希ちゃんは苦手だけど体が弱いし優子ちゃんはAクラスになる為に誰よりも努力を惜しまずやってきてたから…僕はその二人の力になりたくて…」

「それだけで試召戦争を起こすお前さんでは無いだろう？」

流石、この学園の学園長であり試験召喚システムを確立した人なだけはある…孫である僕の性格もお見通しか。

「勿論、最終目標はAクラス。そこで僕たちが勝ったら特定の人たちの振り分け試験の再試験をして欲しいんだ」

「アハハッ！面白い、お前さんは頭が良いが頭が良くてここまで人の為にバカになれる奴なんてそうは居ない。その願い、聞き入れようじゃないか！」

「ありがとう、おばあちゃん!!」

「礼はAクラスに勝ってから言いな！」

「うん、わかった!!」

そう言っ僕はおばあちゃんに言っっておばあちゃんに振り分け試験をして貰う人たちを伝えて学園長室を後にした……

く 学園長 side く

やはりと言うかなんとまあ…予想通りの回答だね。

再振り分け試験希望者

2年Fクラス代表 坂本雄二
2年Fクラス 木下優子
2年Fクラス 土屋康太
2年Fクラス 姫路瑞希

他のFクラス連中は明久が頼んでたとしても結果は変わらないだろう、それが分かっているのか上記の4名しか明久は指定しなかった。しかし、問題はそこでは無い。

あいつは自分の事よりも他の人間を優先してしまう…あいつも木下を保健室に連れて行かなければAクラス代表は確定していたというのに…いや、それは明久のプライドが許さないだろう。

それに報いるには祖母としていや、学園長として明久に報いらなければならぬ。

結局は身内鼻根と言われても仕方がないがしてやれる事を学園規約の穴を突くとするさあね。

〈 学園長 side out 〉